

おしゃぶりの影響と思われる開咬を検討する

○林 秀, 深水 篤¹, 伊東泰蔵²
 (ふるげん歯科クリニック, ¹伊東歯科口腔病院,
²いとう歯科医院)

【目的】

歯科医学大辞典では、おしゃぶりとは育児玩具で、わが国では使用は望ましくないとされている。しかし米国では、泣き止まない状態や指しゃぶり防止に効果的であるとしている。使う期間として新生児用から販売されているのが現状で、2歳半までには使用を中止させるような注意勧告を見る。

小児科と小児歯科の保健検討委員会で望ましいあり方について検討を行ったところ、年齢が高くなるまで長期に使用しない、2歳までに止めて欲しいという要望を示しているが、小児保健の現場で混乱が生じているのも事実である。

今回は習慣的におしゃぶりを使用していた男児に対して、短期間で開咬例を改善した症例について報告する。

【方法】

症例：3歳6か月 男児

歯科検診で、乳中切歯のう蝕を指摘された。口腔内所見では、乳中切歯のう蝕と乳側切歯間までの開咬を認めた。乳犬歯から乳臼歯までは緊密に咬合していた。

既往歴：1歳頃からおしゃぶりを習慣的に行うようになったとのこと。当時母親は家業が忙しくなったために使用するようになったとの感想であった。

【結果】

治療は、器具・装置は一切使用しなくて約8か月で開咬が改善された。これは初診時以降から玩具の装着を止めてしまい、1か月後には開口が狭まったということだった。

【まとめ】

医学的根拠はないが、赤ちゃんの心を安定させるとか、保護者の負担軽減になるような宣伝効果にも小児の年齢を考慮する必要性を感じた。

可撤式咬合誘導装置の装着率向上を目指して
 ～つけてくれてありがとう～

○上杉 栞, 河原優美, 石通宏行
 (医) コアラ小児歯科)

【目的】昨年、可撤式咬合誘導装置の装着率向上に関わる要素について調査した。その結果、目安である1日10時間以上装着できている患児は覚醒時の装着時間が長いことがわかった。今回は、目安に満たない装着時間を改善すべく、患児と直接話をする事で装着時間に変化が見られるか調査した。また、習い事や夕食の時間が装着時間に影響を与えているか否かも合わせて調査した。

【対象と方法】可撤式咬合誘導装置を装着している患児80人とその保護者を対象とし、家庭での装着時間と各家庭の生活背景についての実態を調査した。生活背景を把握した上で、覚醒時の装着を確保するための提案をした。1か月後、再度装着時間について調査した。

【結果】指導前の調査では、10時間以上装着できている患児は3割であった。そのうち覚醒時の装着ができている患児は6割で、その平均時間は1時間であった。習い事の週平均日数は、装着時間が10時間以上の患児は約3日、10時間未満では約4日であることがわかった。夕食は装着時間に関わらず20時より早い家庭が多かった。指導してから1か月後の調査で、10時間以上装着できている患児は5割に増加した。指導前の調査で覚醒時の装着ができなかった患児7割のうちの約半数が装着できるようになった。10時間以上装着できている患児は、装着時間を維持できている患児を含め7割に増加した。

【評価・考察】以上の結果から、当院側から具体的に装着時間の提案をすることで多くの患児に改善が見られることがわかった。改善が見られなかった患児の中には話した内容を覚えていたにも関わらず、行動に移せなかった患児も多く見られた。故に、行動に移せるような工夫をしていく必要があると改めて実感した。習い事や夕食の時間が与える影響は少なかったが、各患児の生活背景を知ることで装着時間を確保するための提案ができた。長時間装着することが成果につながることを感じてもらうべく、作り手である歯科技工士として今後もできることを日々模索していきたい。